

刊行にあたって

本書は、令和2年（2020）度を期して、兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室内に組織された「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクトの3ヶ年に及ぶ調査研究活動の成果として公表されるものです。

兵庫・徳島両県知事の提案により「鳴門海峡の渦潮」世界遺産登録推進協議会が結成されたのは平成26年（2014）12月のことで、翌27年度には「鳴門海峡の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会が設置され、平成29年（2017）度から「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査委員会へ改組され今日に至っています。興味深いのは「鳴門海峡の渦潮」（以下「鳴門の渦潮」と略記）の自然的価値は兵庫県、文化的価値は徳島県が、それぞれ事務局を置いて担当することとして学術調査が進められてきたことです。

その背景にはUNESCO世界遺産委員会が定める世界遺産評価基準（OUV）があります。「鳴門の渦潮」の場合、文化遺産として見るなら下記の基準のiii・v・viが、自然遺産として見るならvii・viiiが、登録にあたって適当であると判断されたことから、当面、自然部会と文化部会に分けて学術調査を進めることとなったのです。

- iii 現存するか消滅しているかにかかわらず、ある文化的伝統又は文明の存在を伝承する物証として無二の存在である。
- v ある一つの文化（または複数の文化）を特徴づけるような伝統的居住形態もしくは陸上・海上の土地利用形態を代表する顕著な見本である。
- vi 顕著な普遍的価値を有する出来事（行事）、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接又は実質的関連がある。
- vii 最上級の自然現象、又は、類まれな自然美・美的価値を有する地域を包含する。
- viii 生命進化の記録や、地形形成における重要な進行中の地質学的過程、あるいは重要な地形的又は自然地理学的特徴といった、地球の歴史の主要な段階を代表する顕著な見本である。

両部会での学術調査の結果は毎年3月、両県知事出席の下で開催される世界遺産登録推進協議会総会（会場は南あわじ市と鳴門市が隔年で担当）の席上、普及・啓発活動の成果とともに報告され、審議・了承されています。

文化部会でいえば、平成29年（2017）3月に『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～』（以下『報告書～文化編～』という）が発表され、平成31年（2019）4月には、同報告書を補充するものとして『「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査報告書～文化編～vol.2』が取りまとめられ、公表されました。『報告書～文化編～』は、平成27年（2015）度の事業として、「鳴門の渦潮」世界遺産登録学術調査検討委員会文化部会（金田章裕委員長）の下に14名の専門委員が委嘱され、それぞれの委員が進めた調査研究の成果を収めたもので、第1部名所「鳴門の渦潮」の成立、第2部名所「鳴門の渦潮」と阿波・淡路、第3部名所「鳴門の渦潮」と産業、第4部名所「鳴門の渦潮」の展開、という構成になっています。

文学・美術・地理・歴史・塩業・観光・民俗など多彩な分野の専門家を集めたことから『報告書～文化編～』は、「鳴門の渦潮」を広い視点から位置づけた成果となっています。その一方、徳島県が中心となっていることから、兵庫県側、とくに淡路島の渦潮関連文化遺産の調査が課題として浮上りました。その結果、令和2年（2020）6月、兵庫県立歴史博物館内に「鳴門の

渦潮」調査研究プロジェクト実行委員会（実行委員長は館長）が結成され、ひょうご歴史研究室の下に、調査研究事業を推進することとなりました。

調査研究メンバーの構成にあたっては、ひょうご歴史研究室のメンバーを中心としながらも徳島県からの参加を求め、さらに研究課題の上から必要な人材を補強しました。当初の研究課題は以下の通りです（各人の所属については、3頁の名簿を参照してください）。

坂江 渉	大阪湾岸の海人と「渦潮」
古市 晃	古代の南海路と「渦潮」
大村拓生	中世の瀬戸内水運と港津
山上雅弘	阿波・淡路の水軍と城郭
木村修二	「渦潮」と津波災害
福家清司	淡路の荘園と地域の信仰
磯本宏紀	淡路の漁労民俗と沼島

さきの『報告書～文化編～』と比べてみると、前近代の歴史が中心であることが明らかですが、その背景には平成28年（2016）度、兵庫県並びに淡路3市（淡路市・洲本市・南あわじ市）が中心となって日本遺産「国生みの島・淡路」が認定され、翌29年（2017）度から日本遺産委員会とひょうご歴史研究室の間の連携が始まっていたことがあります。その意味で淡路3市、とくに文化財関係部局の協力は、本事業の実施にとってきわめて大きな意味を持ちました。あわせて世界遺産登録推進協議会の構成団体である淡路県民局には、研究会の会場を定期的に提供していただくなどのご協力を賜りました。両者に対しこの機会に、深甚なる謝意を表したいと思います。

本プロジェクトの実施にあたっては、新型コロナウイルス感染症の蔓延という予想外の事態が立ち上がり、とりわけ調査に支障をきたしたことから、2ヶ年の予定は一年延期して3ヶ年となりました。幸いその間、プロジェクトの事業の一つとして、かつて兵庫県立歴史博物館が進めた淡路島総合調査の成果を取りまとめることができ、令和3年（2021）12月、『淡路島文化財総合調査報告書1988-2000』として公表し、同年度の世界遺産登録推進協議会総会に提出することができました。その中から浮上したテーマが一つ、本報告書に論考並びに資料編として収められています。19世紀の前半に徳島藩が阿波・淡路両国で進めた村ごとの「分間絵図」^{ぶんげん}作成の成果が、淡路3市に多数、残されているという事実の再確認です。

その内容は資料編に譲りますが、詳細な研究が進んでいる徳島県（阿波）側と比べ、遅れている淡路側での調査・研究を進展させる可能性を持っています。それは同時に、自然部会で積み上げられている「鳴門海峡の渦潮」の水理模型や、淡路島の地質・地形調査の成果とリンクする可能性も出てきています。令和4年（2022）7月に自然部会との研究交流会を持ったことは、その可能性に示唆を与えることとなりました。その折の報告は、別編として収められていますが、本報告書の成果の一つと言えるでしょう。掲載を許可するとともに論文を御執筆頂いた上嶋英機・加藤茂弘両氏にお礼を申し上げます。

最後に3ヶ年の間、ご尽力いただき、玉稿をお寄せいただきました諸先生方、ならびに臨時職員として『淡路島文化財総合調査報告書』および本報告書の刊行にご協力いただきました福永明子氏に、衷心よりお礼申し上げます。

令和5年（2023）2月

「鳴門の渦潮」調査研究プロジェクト代表
藪田 貫（兵庫県立歴史博物館館長）